

「底が突き抜けた」時代の歩き方 459

「多文化主義のエリート」と「愛国的な大衆」の分裂 米大統領選

《かつて米国のことを、こんなふう^{やゆ}に揶揄した作家がいる。「力をもてあまし、止まりがつかず、本能の命じるまま、田舎ものが若盛りのばか騒ぎをしている」(『バウハウスからマイホームまで』晶文社) ニューヨーク在住の人気作家トム・ウルフ氏である。投票日直前、彼が英紙にブッシュ支持を公言したことが話題になった。英紙にいわせれば「記憶にあるかぎり最も保守的で、右翼と金持ちを擁護し、戦争の泥沼に引き込んだブッシュ政権」なのに、なぜ?である ニューヨークの作家や知識人はたいてい反ブッシュだという思いこみがある。ウルフ氏は「東海岸の気取った連中に支配されたくない」という人々の怨念がブッシュ陣営を支えてきたと言い、彼の故郷バージニア州を含む米国南部や中西部の人々に共感を表明した 選挙結果を地図で見ると、確かに色分けがはっきりしている。ケリー支持は東北部と西海岸に偏る。それ以外はブッシュ支持一色だ。ニューヨークはアメリカではない、という言葉とともに、中西部、南部こそがアメリカの核だという言葉の思い浮かべる 地理的な色分けだけではない。あの国の人たちの心理の奥をのぞかされる気もした。宗教的信条を背景に同性愛や人口中絶を忌避する人々がブッシュ支持の核になった。「内戦」と表現するコラムもある ブッシュ支持を公言したウルフ氏の新作は大学での性がテーマだ。保守派には忌避されるだろうという。彼は「イラク侵略」にも批判的だ。このねじれが、米国のいま、を映してもいる。》

11.6 付朝日の「天声人語」(全文)にはこう書かれている。「ニューヨークの作家や知識人はたいてい反ブッシュだという思いこみがある」と、あたかも「反ブッシュ」ではない作家や知識人もニューヨークにはいるのだという書きかたをしているが、そりゃあ、二千万近い人口を擁する大都市なのだから、ブッシュ支持の作家や知識人もいるだろう。しかし、私の目に触れるかぎり、ブッシュ支持の作家には雑誌では一度もお目にかからない。高名な歴史学者であるイギリス人のポール・ジョンソンが、60年の選挙では民主党のケネディを支持したが、《近年では、私は共和党の候補者を応援し続けている。それは大統領として、そして西側諸国の安全保障をリードする立場にある者として、より安心感を持って見ていられるからだ。この考えは、同時多発テロ以降のブッシュ大統領の対テロ政策によって、いっそう強固なものとなった》(『Forbes/US』04.11)と主張しているのが目に付いたぐらいである。作家の新元良一が大統領選を前にして、アメリカの作家たちの声を聞き取ろうとする旅を続けており、その短期集中連載『アメリカン・ヴォイセズ』(『文学界』04.10～12途中)でも、すべての作家が公然と「反ブッシュ」の姿勢を貫いている。彼らの発言を抜粋してみる。

「そのアメリカ人とはどんな人間かという、考え方が広く、心を開いた人たちです。どんな人間であっても、アメリカ人となれる、という考え方は素晴らしいことではないでしょうか。過去にどんな社会や境遇で生きていたかは問わないという意味は、いかなる人間でもこの国にやって来ることができて、自由に行動でき、自分の望むものを手に入れるチャンスがあるということです。もちろん、様々な社会的な問題は存在するけれども、それに心を開いて臨むのがアメリカ人の本来あるべき姿です。」(47年ニューヨーク市生まれ、在住、リン・ティルマン)

「わたしのまわりは、ブッシュ退陣を支持する人間ばかりだが、この国にはそれとは違った考えの人々も多い。実行力に優れ、誠実で、価値観が共有でき、諸外国がなんと言おうと、アメリカが安全であるように闘ってくれる素晴らしい指導者、と見る向きが少なからずある。わたしは、自分には理解できないコミュニケーション言語を使う人々がいる国に住んでいる、そんな気がしてならない。2000年の大統領選のとき、わたしはニューヨークにいたが、ブッシュはニューヨークではあまり評価されていなかった。では一体、誰が彼に投票して、こんな選挙結果になったのか。おそらく、彼を支援するアメリカ市民が、この国のどこかにいたのだろう。」(45年アラバマ州生まれ、サンフランシスコ在住、トバイアス・ウルフ)

「アメリカとは自由の国である、といったブッシュの言葉に、彼らは翻弄されている。自由が邪悪な人間の手により奪い取られてもいいのか、といった話に惑わされている。ある意味で、ブッシュは意固地と言える人間だから、武力でとことん邪悪な人間を追い払うと主張すれば、国民の中にはそれを信じようとする者が出てくる。外に出て戦おうとせず、議論に終始している政治家に対しては、そうした人々から見れば不安を覚える人物像が浮かぶ。口先だけでは、敵の思うつぼ、とか言ってね。しかし、民主主義国家と名乗るなら、議論を避け、攻撃を仕掛けることだけに集中するのは大きな間違いだ。話し合うことで、人間は改心する可能性も十分にある。」(49年生まれ、アイオワ州在住、デニス・ジョンソン)

「ただ、今の段階では、選挙の行方は誰にも見当がつかない。一般的な世界では、1 プラス1なら2になるはずだが、政治の世界ではそうならないことがある。というのも、9・11の影響は、まるで魔力のように計り知れないからだ。それに加えて、選挙に勝利するためには、共和党はどんなことでもやるという強硬姿勢ときている。しかし、彼らの発表することは、経済の部分だけをとって間違いだらけで、ブッシュ政権誕生以来、経済面での運営にフォーカスをあて続けている「ニューヨーク・タイムズ」の評論家のコラムを読むと、その過ちの多さに、これは単に間違っているのではなく、意図的に悪い方向に先導していると思わざるを得ない。反ブッシュをもって任じ、言説が確かなこの評論家は、これほど虚言の多い政権はアメリカ史でも前例がなく、さらに4年間、同じ状態が継続されれば、この国は低迷するのが確実と結論づけている。」(49年南アフリカ生まれ、ニューヨーク在住、バリー・ユアグロー)

「共和党に対する、そのイメージは間違っていない。アメリカ社会で最も裕福な人間のほとんどが共和党員だろう。しかし、そうした人間以外に支持者を集められるのも、レーガノミックスと言われる、下層中産階級の市民への救済をうたい文句にした経済政策を敷いて、彼らに関心を抱かせたロナルド・レーガンのおかげだ。(この慣例にならぬ) ブッシュは選挙活動で、減税を打ち出し、就業率を上昇させると発言し、有権者に訴えている。だが、大多数の有権者は、それがどういう意味合いのものであるか、実態をわかっていないのではないだろうか。わたし自身も隅々まで把握しているかどうか自信はないが、要するに、ブッシュの言わんとするのは、大企業各社の税負担を軽減すれば、その分だけ雇用の機会も増えるということだ。しかし、実情はそんな風にはならない。企業への減税が進めば、逆に、下層中産階級の彼らにしわ寄せが来るのは目に見えている。『What's the Matter with Kansas?』という、「なぜこの国(アメリカ)の人々は、自分から関心を持って投票しないのか」を主題とする本の中で、有権者は政治における、自分たちの力を過小評価している、といった興味深い事象が紹介されている。つまり、ブッシュがオハイオ州のような地方に出向いて、経済は上向きになりつつも、就業人口は減少云々などと宣ったところで、アメリカ人は注意を払わないと言うのだ。彼らが喜ぶのは、暗闇の中で輝く月光のような(心を癒してくれる)レーガンの笑顔というわけだ。そんなことを考えると、まったくうんざりさせられる。」(44年生まれ、メイン州在住、リチャード・フォード)

「作家だけでなく、わたしたちはそれぞれに役割があるのではないのでしょうか。大切なことは、今、世の中で何が起きているのかを知ろうとする意志です。作家は、必要と感じれば、政治的な内容の文章を手がけるでしょうが、それもその人次第なのです。あまり政治的な文章を得意としなくても、自分が真実と思えること、自分が感じること、あるいは、感じないことを伝えていくこともまた重要であって、人間は個々に、社会に対しての義務があるのです。

わたしが政治に関心を持つのは、人間がどのように生きるかを知りたいからです。男女がどのように社会で共存しているのか。子どもの生活とはどういうものなのか。そうしたことに考えをめぐらすと、自然と政治との関わり合いが生まれます。わたしには黒人の孫がふたりいますが、この小さな子どもたちの人権についてよく考えます。多数の白人が暮らす地域社会でどのように生きていくのか、彼らの行く末に関心があるのも、そんな理由からです。」(22年ニューヨーク生まれ、ヴァーモント州在住、グレイス・ペイリー)

「作家や他の知識人たちが公の場で、体制に物申す姿勢は評価できるが、彼らが社会にさほど影響を与えようとは、わたしは思わない。政治に関する作家の発言について、一般市民が気に留めることはないし、作家の意見が、投票の行方を左右するものでもない。また、ハリウッドの映画俳優が、政治家や特定の団体を応援したり、交流を深めるのはよくある話だが、応援して彼ら(俳優たち)が失うものは何もないし、そんな話を聞いたところで、一般有権者は笑い事のように受け流すだけだろう。たとえば、「ニューヨ

カー」という雑誌で、現政権が犯した過ちなどをレポートした記事を頻りに掲載している。しかし、この雑誌の中心読者は民主党寄りの有権者だから、記事の内容で選挙結果が変わることもないのと同様に。」(ニューヨーク在住、ゲイリー・フィスケットジョン)
「善くも悪くも、アメリカは可能性に溢れた国です。ヨーロッパへは何度も出かけましたが、旅先で出会った人たちから、自分がやりたいと思い描くことを実行するのは難しい、といったことを何度も聞かされました。しかし、このアメリカという国にいと、もちろん実現しないかもしれないけれど、自分の望むことがかなえられるという感触が得られる気がします。社会問題、たとえば貧困などはまだどこかにあるにしても、アメリカン・ドリームという、ゼロからスタートし、小さいものを積み重ねていき、大きな目標を達成する夢はこの国に残されています。実際に、何も無いところからチャンスをつかんで、素晴らしい人生を手に入れた人はわたしの周りでもいます。また、新しいことを歓迎する懐の深いところが、アメリカにはあります。新しいビジネスを始めたり、新しいアートが創作されると、可能性を見出され、大きなチャンスが得られることもある。そうした想像力を活かせる国なのです。

海外の文化や人に対し、干渉し、威圧的であるというのが負の部分とすれば、そうしたものを受け入れる器があるのが正の部分です。それは、移民の歴史でもあり、長年、アメリカはそこで自由や可能性を標榜してきたのです。ところが、人は歴史を忘れることもある。今のブッシュ政権は、そのいい例です。現政権が推進するような、自分で何でもやれるという間違った考え方ではなく、他の人々と歩調を合わせるといった、元来アメリカの持つ寛容さに立ち戻る必要があるとわたしは考えています。」(シカゴ生まれ、ニューヨーク在住、ジェニファー・イーガン)

以上、8人の作家の居住州はニューヨーク州4人、カリフォルニア州1人、メイン州1人、ヴァーモント州1人(以上、青の民主党洲)、赤の共和党洲であるアイオワ州1人の内訳となっている。冒頭の「天声人語」で取り上げられた作家のトム・ウルフの故郷バージニア州は赤の共和党洲である。編集者でもあるゲイリー・フィスケットジョンがいみじくも、「手がける作品の出来はともかく、物書きと言うのは観察力を研ぎ澄まし、書物をよく読み、知性を働かす人間たちだ。となれば、自ずと今の状況を見て、ブッシュ支持にまわらないはずだ」と言い放つように、イラク開戦に至る決断について「神に相談する」ような、およそ思慮深さとは無縁な直感政治のブッシュを支持する作家がニューヨークに在住していること自体、ちょっとした驚きである。だからこそ、「天声人語」も取り上げたと推測されるが、ブッシュ支持でありながらも「イラク侵略」には批判的なトム・ウルフをみて、「このねじれが、米国のいま、を映してもいる」と、「天声人語」は意味ありげに結ぶものの、「このねじれ」についての考察は放置されたままである。

トム・ウルフが「『東海岸の気取った連中に支配されたくない』という人々の怨念がブッシュ陣営を支えてきたと言」うなら、内陸部の「神の国」を信じる連中に支配されたくないという人々の怨念がケリー陣営を支えてきたとも言える筈である。作家である

なら、複眼的に物ごとをみる習慣がついている筈であり、トム・ウルフもまた、他のニューヨーク在住の作家たちと同様に、多文化主義の土壌の上に咲く「可能性のあるアメリカ」のよさを十分味わってきていると思われる。その「可能性のあるアメリカ」の余地がブッシュ再選によって狭められていく危険性も熟知している筈だ。それなのに、「イラク侵略」にも批判的なのに、彼は「ブッシュ支持を公言した」のである。彼が英紙に寄せた文章に目を通していないので、ブッシュ支持の理由について彼の文章に即して把握することはできないが、「天声人語」の全体から推測してみる。

手掛かりは、「彼の故郷バージニア州を含む米国南部や中西部の人々に共感を表明した」という記述と、「ニューヨークはアメリカではない、という言葉とともに、中西部、南部こそがアメリカの核だという言葉の思い浮かべる」という個所にあるとみられる。トム・ウルフは必ずしもブッシュ支持ではなかったが、「彼の故郷バージニア州を含む米国南部や中西部の人々」がブッシュ支持であったから、彼らに共感を示してブッシュ支持に回ったと考えられる。ニューヨークに在住しながらも、いや、ニューヨークに在住していたからこそ、彼はまるでニューヨークとは反対の気質の故郷の人々に共感を抱き続けていたのであろう。逆にいえば、「反ブッシュ」を貫く先の作家たちは、トム・ウルフのような故郷と切断されていたのかもしれない。

トム・ウルフが自分の住むニューヨークの人々に対してではなく、共感を表明した「彼の故郷バージニア州を含む米国南部や中西部の人々」については、青木富貴子が（『論座』05.1）で、こう説明している。海岸線を持たない内陸部に住む彼らは、「果てしなく広がる平原で牛が草を食み、雁が隊列を組んで南の空を目指す」日々を送り、「夜明けとともに起き」て働き、「外界の軋轢に煩わされることなく自然と親しみ、楽しみといえば教会へ行ってピンゴに興じることくらい。その教会では、聖書の言葉を文字通りそのまま受け取り、天国へ行くには神の言葉を信じなければならないという信仰を当たり前と思う土地柄である。」そんな彼らにも時代の波が押し寄せ、「インターネットが普及して国境の無いボーダレスの時代に」なるにつれて、「恵まれていない」という思いが募り、「時代に取り残された」孤立感が深まるなかで、「内なる神への進行を篤くし」ていく。

そのような人々にとって、「時代を先取りするニューヨークやシリコンバレーの市民は、利益ばかりを求める金の亡者で、お高くとまったりベラルだから、彼らとは価値観を共有できないといって嫌悪」するようになる。おそらくそこには都会人に対する田舎者のコンプレックスが剥き出しにされているだろうし、アメリカを代表しているような都会への対抗意識も伏在しているにちがいない。「ニューヨークはアメリカではな」く、「中西部、南部こそがアメリカの核だ」というトム・ウルフの思いには、米国南部や中西部の人々こそがアメリカを築いてきたという誇りのようなものがこめられており、彼らを置き去りにするなら、アメリカはもはやアメリカではなくなってしまうという危機感がみられる。アメリカ人は自分たちの故郷を忘れるな！ ということかもしれない。

しかしながら、アメリカはまた、自分たちの故郷を持たない、あるいは、故郷を捨て

去った移民によって成り立っている国でもある。アメリカン・ドリームを手に入れようと、新天地を求めてやってきた人々にとっての故郷とは、当然移民がひしめく東海岸にほかならなかった。現在のアメリカは紛れもなく、そのような人々によって発展させられてきたのだ。そのような人々の視野にはウルフの「故郷バージニア州を含む米国南部や中西部の人々」、すなわち、彼が「アメリカの核」とみなす人々が入っていなかったとすれば、そして彼がそのことに反撥を示していたとすれば、ウルフの視野の中にも、「東海岸の気取った連中」にとっての故郷が東海岸であり、彼らの活力こそがアメリカの衰退を救ってきていることへのまなざしが欠如しているのが感じられる。お互いが自分の見ている先に相手が含まれていなければ、行きつくのは感情論であろう。

しかし、「イラク侵略」に批判的なウルフのブッシュ支持には、もっと深刻な問題が横たわっている。彼が支持するブッシュ政権が「イラク侵略」と無縁であったなら、彼のブッシュ支持は米国内の比重の置き方の相違で済ませられる。ところが、彼のブッシュ支持が彼にとって批判的な「イラク侵略」につながってくるなら、「このねじれ」については彼自身真正面から対峙しないわけにはいかない。彼のブッシュ支持が彼の故郷の人々への共感と一体となっていることを踏まえると、問いは彼にむかって、自分の故郷の人々への共感と自分にとって批判的な「イラク侵略」とはどのように激突したのか、そして前者が後者を抑えてブッシュ支持に至ったのか、というかたちをとって差し迫ってこなくてはならない。もっと突っ込むなら、自分の故郷の人々への共感の表明には多くの人の「血が流れる」ことはないが、「イラク侵略」には多くの人々の理不尽な「血が流れている」という問題でもあった。ウルフが支持するブッシュ政権による「イラク侵略」には、流さなくともよい多くの流血が伴っている事態に対して、ウルフには作家として自分の故郷の人々への共感だけでは収まらない言葉を紡ぐ責任が問われていた筈だ。

もちろん、「イラク侵略」がもたらした多数の死者にはウルフのそのような言葉などなんの供養にもならないが、ブッシュ支持が「イラク侵略」に直結する以上、自分は「イラク侵略」には批判的だが、ブッシュを支持するという自分自身の「ねじれ」を問わずには、彼は作家であることはできなかった。この問題はウルフに対してだけでなく、ブッシュ支持層の中の「イラク侵略」に批判的な人々の「ねじれ」に対しても向かっている。この「ねじれ」を放置しつづけるなら、今後のアメリカはこの「ねじれ」の拡大の中に沈んでいくにちがいない。ケリー支持層が多い「東海岸の気取った連中」には、この「ねじれ」は無縁だったろうが、ブッシュ支持層の多い中西部、南部にこの「ねじれ」に見舞われた人々が少なからず存在したと推測されるが、この「ねじれ」現象が大きく浮き彫りにされたのは、同性婚の是非を大統領選に合わせて投票で問うた 11 州においてであった。

ジャーナリスト中岡望の報告（『諸君!』05.1）によれば、オハイオ州の《地元の共和党組織は、ブッシュ選挙本部とは別に「同性婚反対」運動を展開した。共和党の政策綱領には、同性婚反対は盛り込まれていなかった。しかし、同州の共和党は同性婚の禁止を積極的に選挙のテーマに取り上げ、同性婚を規制する州憲法修正の住民投票も同時に

行なわれたのである。(中略)オハイオ州では、共和党組織は同性婚反対を訴えるために有権者に300万回電話をかけ、250万枚のビラを配っている。また宗教団体(...)がオハイオ州とミシガン州で百万ドルの資金を使って同性婚反対のキャンペーンを展開するなど、大統領選挙と並行して同性婚反対の州憲法修正も大きな選挙課題となった。》

11州で行われた同性婚禁止の州憲法修正はいずれも大差で承認され、うち9州がブッシュ勝利に終わった。アーカンソー、ジョージア、ケンタッキー、ミシシッピ、モンタナ、ノースダコタ、オハイオ、オクラホマ、ユタであり、ケリー勝利はオレゴンとミシガンのみであった。《こうした同性婚反対運動が大統領選挙に大きな影響を与えたことは疑問の余地がない。本来なら経済問題やイラク戦争が大きな焦点になるはずであったが、オハイオ州では同性婚に関連する道徳的な問題に焦点がすりかえられてしまった感がある。オハイオ州の投票後の出口調査で有権者の最大の関心事は、「経済・雇用」が24%、「道徳的価値観」が23%、「テロリズム」が17%であった。オハイオ州は経済状況が全国と比べて深刻なことから「経済・雇用」がトップにランクされているが、ほぼ同率で「道徳的価値観」が続いている。ブッシュ陣営が主張する「道徳的価値観」と「テロ対策」を合計すると、「経済・雇用」を大きく凌ぐのである。なお、全国平均では3分の2の有権者が「道徳的価値観」を投票を決定する際に最も重視する課題であると答えている。》

ケリーと人気ロックスターのブルース・スプリングスティーンのコンビに対して、ブッシュはシュワルツェネッガー・カリフォルニア州知事とのコンビで、最後の選挙運動を行うほど、両陣営はオハイオ州を最重視していた。《オハイオ州は16万票差でブッシュがゴアを破っている。かつての大統領選挙で民主党の大統領候補がオハイオ州で勝利を収めたことは一度もない。しかし、ケリー陣営は、今回はオハイオ州では十分に勝算があり、ここで勝てば大統領選挙に勝てると考えていた。オハイオ州の選挙人はわずか20名に過ぎないが、同州で選挙運動を優勢に進めれば、他の「スイング・ステート」でも優位に立てるとの判断があった。》ケリー陣営が勝算があると考えたのは、《同州は、ブッシュ政権の4年間で最も経済的に深刻な影響を被った州であるからだ。ケリーにとって、ブッシュ政権の経済政策の失敗を訴える最適の州であった。ブッシュ政権が成立した01年1月以降、オハイオ州の雇用は23万人以上減っている。これは各州の中で最大の雇用喪失である。同州は鉄鋼などスモーク・スタックと呼ばれる古い産業が多く、情報革命に完全に乗り遅れていることから、景気立ち直りのきっかけをつかめず、雇用情勢には他州よりも厳しいものがあった。》

報告は前回のフロリダ州に相当する、大統領選の象徴的な比重をもつオハイオ州に焦点を当てているが、ケリーが「経済・雇用」に絞ってオハイオ州に乗り込んだのに対して、ブッシュは同性婚という「道徳的価値観」を掲げて対抗したのだ。《同州の88郡のうち失業率が10%を超える郡は6つあり、州平均の5.7%を超える郡は33もある。同州の中心地クリーブランドは「アメリカの大都市の中で一番貧しい都市」(ジェイン・キャンベル市長)なのである。同市の最大の課題は貧困で、10月に市の有力者を集めて「貧

困サミット」を開き、貧困撲滅の道を模索しているが、もはや市の段階では切り札はないのが実情である。》不況によって減少しつつも、労組に加盟する組織労働者を最大の頼みとするケリーに対して、ブッシュは同性婚に反対する宗教団体を味方につけて戦い、ケリーの得票数 265 万票 (49%) を上回る 279 万票 (51%) を獲得してオハイオ州を制した。

同性愛や人工中絶の容認はいうまでもなく、「多文化主義」の流れの中にある。自分と異なる他者と共存しようとする姿勢のあらわれであり、逆にそれらに反対する人々は異質な他者を排除する流れを構成している。したがって、彼らの「道徳的価値観」は他の異なる「道徳的価値観」を敵対するものとして取り扱い、滅ぼすか滅ぼされるか以外の方途はありえないとして、攻撃を先鋭化させる。大統領選の出口調査で投票で重視した点として、「道徳的価値観」、「経済・雇用」、「テロ」、「イラク」の順に回答されているが、「道徳的価値観」を重視する姿勢は、キリスト教を背景に「多文化主義」の流れを阻止する点において、つまり、異なる他者の排除に向かう点において、イスラム教を敵視する対外政策のあらわれでもある「テロ」や「イラク」と折り重なっても、離反することは決してありえないのである。

ここでもう一度、「故郷バージニア州を含む米国南部や中西部の人々に共感を表明し」て、ブッシュ支持を公言した作家のトム・ウルフを思い出してみよう。彼の故郷の人々は「宗教的信条を背景に同性愛や人工中絶を忌避する人々」であり、彼らの「宗教的信条を背景に」した宗教的排他主義は、そのまま「イラク侵略」につながる発想を剥き出しにしている。ウルフはやはり故郷の人々という点だけで甘やかな感傷に溺れず、彼らの慎ましやかな生活の底流にある「恵まれていない」という思いや、「時代に取り残された」孤立感が福音主義と結びついて、どのような潮流をかたちづくっているか、について冷徹に見透す必要があった。「ニューヨークはアメリカではなおこく、「中西部、南部こそがアメリカの核だという言葉」にも傲りと共に、視野狭窄が感じられてならない。なるほど、ニューヨークの人々にむかっては、先発者として自分たち「中西部、南部こそがアメリカの核だということ」ができるかもしれないが、では、先住者であるネイティブアメリカンに対しては、同じことがいえるだろうか。

アメリカ先住民に対しては自分たちもまた、後発組にほかならないという内省的なまなざしがウルフには全く欠如している。後発組同士でニューヨークに対して、「中西部、南部こそがアメリカの核だ」と言い返してみたところで、なんの意味があるだろう。政治学者の藤原帰一は連載「映画のなかのアメリカ」(『論座』04.12)の冒頭で、《19世紀後半以後、東部財界を基盤として発達した共和党は、決して中西部の保守主義を代弁する政党ではなかった。ニュー・ディールの時代から移民層への支持を広げた民主党も、もとはといえばアメリカ南部を基盤とする保守政党だった。そして、二大政党がともに相手の政党を支持する有権者に手を広げていった結果として、政党党派の違いは時代が進むとともに減るはずだった。どちらの政党に入れてもたいした違いはない、そんな時代が訪れたはずだった》のに、今回の大統領選ですっきりと「二つのアメリカ」に割れ

てしまったという。

《支持政党はもちろん宗教もライフスタイルもまるで違う人たちがお互いに向かい合っている。かつて南北に分かれて争ったアメリカが、いまは東部と西部に分裂してしまった。》東部の《工業都市の多くを擁する青い州にはアフリカ系、ヒスパニック、アジア系など白人以外の居住者が多く、白人のなかでもイタリア系やポーランド系などアングロサクソン系以外の占める比重が大きい。これに対して、赤い州では白人の比率が高く、アングロサクソンの比重も大きい。宗教でいえば、赤い州にはエヴァンジェリストをはじめとする敬虔なキリスト教徒が多い。》したがって、東部を体現するケリーと、西部を体現するブッシュとでは、《使う言葉も立ち居振る舞いも、まるで違っている》と説く。

《いつも背筋を伸ばして登場するケリーは、そのままテーブルを起こしてもおかしくない書き言葉のような話し方で終始する。他方のブッシュは、やや前屈みになって、パーティーで気の利いた冗談を披露するように、観衆の受けをねらうような話し方だ。ケリーは裁判所で最終弁論を行うように話し、ブッシュは牧場の仲間がビール片手に盛り上がるように話すといえいいだろうか。》

このふたりの違いは、支持母体となる地域の風土の違いを反映している。かつてイギリスから最初の移民が到着した地、マサチューセッツ州から選出された上院議員であるケリーは、古都ボストンにふさわしい格式と威厳をもって、エリートこそ心すべきリベラリズムを説いている。これに対し、アラモ砦の戦いから以後、常に西部劇の中心地であったテキサスの知事を務めたブッシュは、東部者のような礼儀作法にはとらわれず、気の置けない仲間と盛り上がるようなスタイルだ。

アメリカ社会における東部とは、何よりも財界と政府、そしてリベラルなインテリを特徴とする世界である。礼儀正しいといえは聞こえはよいが、頭でっかちで、カッコばかりつけ、何よりも弱虫。敵に向かって力を使う度胸がない、立場の定まらない臆病者というイメージである。もちろん東部から見ればこれが逆になるわけで、中西部から南部は、田舎者の住むところだということになる。》

この「二つのアメリカ」は、《アメリカン・デモクラシーの二つの世界》にほかならない。《清教徒が移民して以来の伝統を誇るアメリカ東部の民主主義と、中西部における開拓者の民主主義を体現している。それはまた、「外の敵」に対してどのように立ち向かうのか、その闘争と統合の原理の違いといってもいい。》中西部における秩序の原型を示した西部劇である、ジョン・フォードの活劇を見ればわかるように、《一方には、大草原の小さな家、開拓者の村、騎兵隊の砦、あるいは駅馬車のなかのコミュニティーがある。そのコミュニティーを一歩出ると、荒れ果てた砂漠や草原が雲の下に果てしなく広がり、悪漢やインディアンがそこにたむろするのである。》コミュニティーが築かれている場所とはもちろん、開拓者にとっての根拠地にほかならない。

《根拠地には「守られるべき者」としての女性や子どもたちがおり、根拠地の平和を脅かす存在が荒野に広がっている。リンゴ・キッドやワイアット・アープをはじめとし

たフォード映画のヒーローたちは、根拠地のコミュニティーを守るために、荒野に出て行く宿命を負っている。警察や裁判所に法の執行を委ねることのできるような落ち着いた環境に恵まれない以上、コミュニティーを守るためには自分で戦うほかには選択はない。それはヒーローが自分の力では変えることのできない定めであり、その運命を静かに自覚した男と、その男を見守る女性が向かい合うシーンがフォード映画のロマンチズムの核心にある。根拠地と荒野という二つの世界の境界に展開される美学だ。》

9・11以降、世界には根拠地であるアメリカの「平和を脅かす存在が荒野に広がっている」ことを目の当たりにし、国連や国際社会に「法の執行を委ねることのできるような落ち着いた環境に恵まれない以上」、根拠地のアメリカを「守るために、荒野に出て行く宿命を負」い、「自分で戦うほかには選択はない」というように捉えるなら、ブッシュ政権のアフガン空爆、イラク侵攻は全く西部劇そのものだと笑う以外にない。しかし、第二次大戦を独り勝ちしてヨーロッパに取って代わる超大国に上りつめたアメリカにとって、もはや開拓者時代のアメリカはフィットしなくなった。《第二次大戦後のアメリカは、西部劇にとってつらい時代だった。荒野のインディアンを絶対悪とするような視点を公民権運動の時代に支えることはできない。ヒーローを送るだけの役割では女性の納得も得られなくなった。さらに、家、村、砦において人々の支えるコミュニティーも、当たり前のもものではなくなってしまふ。フレッド・ジンネマン監督の『真昼の決闘』(1952年)では、悪漢を前にした村人たちが、孤独に戦うゲリー・クーパーを見殺しにした。サム・ペキンパーになると、『ワイルドバンチ』(1969年)に端的に表れているように、根拠地にはアウトローばかりが闊歩し、すでに平和とは縁遠い世界に変わっている。》

ウィリアム・ワイラー監督の『大いなる西部』(58年)になると、水を巡って二つの家が争うという西部劇の構図の中に、《対話と共存》を持ち込む東部の男が主人公になっており、《戦わない男》の登場は《もう、西部劇というよりも西部劇の否定》に等しい。《ここでは「西部」は終わるべき時代に過ぎず、西部が東部の良識と結びつくことで荒くれ男は姿を消すことになる。巨大な自然を俯瞰するシーンはジョン・フォードと共通していても、そこにあるはずのコミュニティーや根拠地の影はない。西部に残されるのは自然だけで、そこに住む人々は東部主導の政治体制に組み込まれていくことになる。》

西部劇の退潮は、《東部リベラリズムが優位に立った戦後アメリカの時代精神を表現してい》たが、冷戦終焉後、世界で唯一の超大国となったアメリカを直撃した9・11は、戦後アメリカを引っ張ってきた東部リベラリズムに対する揺さぶりの効果をもたらした。《戦わない男ケリーが嘲られ、西部劇の倫理を外交で追求するブッシュ大統領がいまなお支持を集める光景》には、《東部の富と権力と倫理によって組み伏せられたはずであった中西部と南部のアメリカがこれまでにない力を得る姿を見ることができ。東部の勝利であったはずの現代アメリカは、再び中西部の荒野に重心を移そうとしている。》しかし、映画の西部劇が人気を博することはもはやないし、「中西部の荒野」が9・11後のアメリカの新たな時代精神をかたちづくることは到底考えられない。 2005年1月6日記

